国際的結束の革新に向けて

学生協力開発チーム
生物資源科学部　生物環境科学科
1年　岡戸　珠海，渋谷　南
戸毛穂乃美，三村　保翔
生物資源科学部　応用生物科学科
1年　大塚　菜月
指導教員　生物資源科学部　生物環境科学科
助教　川崎　訓昭
准教授　石川　祐一
教授　長濱　健一郎
教授　谷口　吉光
准教授　中村　勝則

１．課題設定の経緯

現代において、ＳＤＧｓに代表する持続可能な社会づくりが意識されるようになった。しかし、ウクライナ戦争を始めとした様々な戦争や紛争が世界の至る所で続いている。これら人間同士の関係の悪化や争いが、本来真っ先に解決させなければならない環境汚染や医療・教育水準向上のための対策の遅れる一因となっている。私たちは、このように連日報道される凄惨な映像や逼迫する現状に日々心を締め付けられ、無力さを覚える。

しかし、どのようにすれば現状を変えていくことができるのかを考えたときに、これからの社会を担う学生同士が共通の課題に向き合って話し合い、様々なことに考えを巡らせるきっかけになる場をつくり、広めていくことなのではないかと思い至ったのである。

２．目的

このような経緯から、本研究では様々な学生にとってアクセスが容易であり、公正な情報を得た上で考え、意見を共有し、この活動を発信していく場をどのようにつくり運営していくのかを明らかにする。

このために、日米学生会議に参加し、一部企画を行った弘前大学学生に聞き取りを行い、このような場の企画運営に必要なノウハウを得る。その後実際に、環境問題や戦争、人種差別などの幅広い題材を扱った、学内だけでなく、全ての学生が参加しやすい学生討論会を企画運営し、これらを世界へ発信していく。また実施をふまえ、環境問題や戦争、人種差別などに興味のない学生に対し、どのように参加を促し、討論会の実施や発信を行うのかを考察する。

３．研究方法と実際の研究過程

①　7/2　弘前大学学生との意見交換

実際に話し合いの場の企画をした学生との意見交換を通して、本研究でどのような学生討論会を企画していくかの方向性や意識するべきことの確認、討論の展開の種類／仕方を学んだ。

② 6/28～11/5　４大学連携ウクライナ支援事業　学生セッション

テーマ「日本はもっと積極的に(避)難民を受け入れるべきか？」

11/14　中国人学生との意見交換　テーマ「中国･日本 それぞれの視点で考える」

12/18　第１回学生討論会

テーマ「日本・地球にとって理想的な電力供給の割合を出してみよう！」

12/18、22　第１回学生討論会反省会

2/12　第２回学生討論会　テーマ「スポーツにおける男女差は必要か？」

2/18　第２回学生討論会反省会

実際に話し合いの場の企画運営を行い、各回の参加者アンケートや反省会を参考に改善を行った。

ウクライナ支援事業では、学生セッションを企画運営し、一般人や学生の参加者９名と語り合った。中国人学生４名との意見交換では、学生支援スタッフ孫さんの通訳の元、中国のパンデミックやウクライナ戦争後の状況やＳＤＧｓに対する意識などを確認し合った。第１回学生討論会では、対面とオンラインを併用し、県立大講義室にて県立大生6名と討論した。第２回学生討論会では、第１回と同様に併用型で、秋田市民交流プラザ会議室にて一般人と学生の参加者９名と討論した。

４．学生討論会の際に使用した備品

椅子、机	必要数	移動式音響設備	1（マイク　1）
パネル	1	付箋、画びょう	必要数
ホワイトボード	1	消毒	1
プロジェクター	1	ＰＣ	2
案内板	1	Zoom用カメラ	1
スクリーン	1	延長コード	1
		レーザーポインター	1

５．得たもの、明らかになったもの

１年を通して企画運営を行ったことで、①当日までの段取り、②テーマの設定の仕方、③進行役及びグループのファシリテーターとしての進行の仕方、④意見の記録の仕方、⑤物事の捉え方等を学び得ることができた。

①当日までの段取り

計４回のイベントを通して、以下の段取りをスムーズに行えるようになった。始めにテーマ設定のため、トピックに関する幅広い情報の収集を行い、テーマ設定後は資料やポスター作成のため、より詳細な情報収集を行った。この工程と同時に、開催日程の調整と会場の確保を行った。資料やポスターが完成後、事前予約の受付と広報活動、参加者への連絡を行った。

事前にメンバー内でプレ討論会をし、当日の進行や役割の確認を行った。また、会場の下見や管理者との打ち合わせを行い、当日の物品等の最終確認を行った。当日、討論会開始前の会場のセッティングから片付けまで終え、後日参加者アンケートの結果を踏まえた反省会を行った。

②テーマの設定の仕方

弘前大学学生との意見交換で、“上向きの議論”と“下向きの議論”という言葉を知った。上向きの議論では、課題に対する具体的な解決策を話し合う下向きの議論とは異なり、浅く広い視点で課題の根本が何かを探る。本研究では専門性に囚われにくいと考え、この上向きの議論を採用した。

テーマを設定する上で特に意識したことは、専門的知識やデータを必要とせず、より日常に結びついているということである(但し、テーマが抽象的すぎる場合、論点が定まらなくなってしまうため、できるだけ焦点を絞ったテーマにした)。また、「Ｙｅｓ／Ｎｏ」で意見を分けられることである。

実際、第１回学生討論会では「日本・地球にとって理想的な電力供給の割合を出してみよう！」のテーマの基で討論を行ったが、答えを「割合」にしたことにより選択肢の数が多く、また専門性が必要になってしまったため、参加者だけでなくファシリテーターも進行に難儀している様子であった。しかしこれを受け、第２回学生討論会では、上記の条件を満たしたことで、討論はスムーズでコミュニケーションを楽しみながら行うことができた。

③進行役及びグループのファシリテーターとしての進行の仕方

まず進行役として、第１に全員が聞き取りやすい大きな声で滑舌よく、また緊張がほぐれるように明るいトーンと快活さを意識した。第２に参加者にとって、当日見聞きすることは初めてであることを念頭に、参加者の内容整理のプロセスを意識しながらスライド説明を行った。第３に各グループの話し合いの進行具合や様子を常に注視しながら時間配分を変更したり、声かけを行ったりした。

次にファシリテーターとして、第１に話の入口と出口を自分の中で持つように意識した(但し、ある程度の方向性は予めメンバー内で定めた)。また、グループ全体で討論の目的を確認しながら、論点がずれないように進めることができた。意見をまとめる際は、最後の１人まで納得できるように努め、１人でも納得出来ない者がいた場合は、全体の結論にはしないようにした。

第２に参加者の意見の共通点を探しながらまとめたり、討論が詰まった際は自分からも意見を言い、これについての意見を指名して求めたりと臨機応変に対応した。同じファシリテーターであっても、それぞれ異なる討論の進行や意見の聞き取り方であった。

第３に意見を聞く際は目を合わせたり、相槌をしたりした。これは基本的なことではあるが、記録しまとめることも必要であるため、難儀しているメンバーもいた。しかし、１グループにファシリテーターが複数人いたことで、メンバーの間で役割分担がなされていた。

④意見の記録の仕方

学生討論会は対面とオンライン(Zoom)との併用型で実施した。話し合ったことや考えたことについて、全体で意見の効果的な共有を行うために、オンラインではZoomの“共有機能”・“ホワイトボード機能”を利用し、対面では模造紙(付箋も活用)とホワイトボードとを併用し、それぞれメモとまとめとの用途に分けた利用が有効であることが分かった。

⑤物事の捉え方

第１に物事に対する自分の意見を持つとき、まず事実に対してはその裏にどのような思惑や理由があるのかを含めた多面的な視点で見ること。第２に事実に対する様々な意見・考えに対して寛容になり、そしてそこから考えが膨らむように聞き取っていくことが大切であることが明らかとなった。このことは、回を重ねるにつれてメンバーの意識が変化した点である。

６．考察・展望

５．得たもの、明らかになったものの①～⑤の項目に対して考察し、展望を記述する。

①１年を通して、段取りをスムーズに行えるようになったが、スケジューリングを行うことができなかった。これによって、無理が生じていた場面や、広報活動期間を十分にとれていなかったこと、参加者への連絡が遅くなってしまったことがあった。今後も企画をする上で、参加者だけでなく関係者にとって、より快適な環境を提供できるよう、事前のスケジューリングを行う必要があると考える。

②共通の課題に向き合って話し合い、様々なことに考えを巡らせるきっかけになる場をつくっていくためには、“上向きの議論”が重要であり、広めていく必要がある。しかし、ある程度この“上向きの議論”が定着したとき、“下向きの議論”を行う場を設ける必要があると考える。このことは、参加者アンケートにて「上向きの議論をしたい」という声が多くある中、「下向きの議論をしたい」という声もあることから明らかである。また、真にＳＤＧｓに関連する課題や討論会への興味関心がない人に対して、どのようなテーマを設定し、広報していくかも今後の課題である。

③まず進行役としては、台本がなくとも進行ができるよう練習をする必要があり、これは進行がスムーズになるだけでなく、参加者の様子に気を配れ、より良い雰囲気づくりができる。次にファシリテーターとしては、５．③を常に意識しつつ、(５．⑤とも共通しているが)聞き取りための視点を増やして行く必要がある。これによって、より充実した討論をすることができる。また、周りに惑わされず、自分のやり方で自信を持って進行することが参加者の安心感につながり、重要であると考える。最後に参加者アンケートから、話すことに苦手意識がある参加者がいることが明らかになったため、より参加者の気持ちに配慮した進行、話の進め方が必要である。

④計４回のイベントを通して見出した、最も良い方法であると考える。しかし、これからもより良い討論を行うための改善を視野に討論を重ね、また新しいシステムや道具を柔軟に取り入れる用意をする必要がある。

⑤現代社会にあふれる情報を冷静にみて判断し、自分の意見を持つこと、そして、他者の意見を否定しないことの、これらが私たちのスタートするところであり、これから進むにつれて深め、幅を広げていくことが必要だと考える。

本研究全体の考察・展望は、“知識・経験を持つ大人の参加者の必要性”と“参加者及び関係者の協力と厚意の重要性”について指摘する。前者について、本研究において始め、対象を学生のみに絞った。これによって経験や知識にとらわれない学生ならではの自由な発想を、自由に発言できる場が創れると考えたためであった。しかし、この発想は知識や経験をより多く積んだ大人がそれらを提供し、一緒に考えてくれるからこそ最大限に引き出されるものであると学んだ。今後は、留学生等への十分な参加準備を行えなかったこともあるため、留学生等の参加も視野に企画し、一般人・学生問わず、より多くの人に参加してもらう方法を検討していく。

後者について、このようなイベントや会を企画開催するためには、チーム関係者だけでなく参加者の厚意や協力があって始めて成立するということが明らかになった。